学校設定科目「探究基礎」で、言語化を通して自分を見つける

畝傍高校（奈良・県立）

研究開発学校の取組として「探究基礎」を設置

畝傍高校は2014年度からはSGH、2019年度からは「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」の指定を受け、早くから課題研究に取り組んできた。2022年度には研究開発学校の指定を受け、独自の探究学習をさらに推進すべく、学校設定科目「探究基礎」を設置。今年度の1年生から実施が始まった。

「探究基礎を設置したのは、従来行ってきた課題研究や理数探究のためというより、全教科を通じた〝学び方〟や〝学びの作法〟を身につけ、生徒たちが〝学ぶ意義〟に気づくためです。常識を疑い、新しい価値を見出す力がすべての学びに必要なことを、生徒たちに理解してほしいと考えています」（教育企画部・杉本和歌子先生）

探究の授業設計に携わった杉本先生は、情報過多の時代に、まわりに流されやすい生徒たちの姿に課題を感じていた。「生徒たちはたくさんのことを大人から問われて、大人の期待に応えることが勉強だと思ってきました。そうではなく、世の中のものごとの、自分が関心のあることに自ら問いを立ててみる。それが、学びの本質だと知ってほしいのです」（杉本先生）

「進路指導でも、やりたいことを尋ねると『親はこう言っている』と答える生徒も少なくありませんでした。塾に行くのも親の指示や友達がみんな行くから。自分の意志が希薄なことが気になっていました」（教務部・中辻和宏先生）

周囲に流されず、誰かの描いた枠の中ではなく、自らの動機で挑戦できるような生徒の育成を目指し、探究の流れを設計していった。2年生の課題研究はグループではなく個人探究としている。一人ひとりの生徒が自分の動機と関心に基づいた、真に関心のあるテーマで自分探しをしてほしいからだ。

自由に柔軟な発想ができる環境や仕掛けを授業に盛り込む

探究基礎は1年生の学校設定科目として、「情報Ⅰ」とそれまでの学校設定科目「グローバル英語」の時間、合計3単位を割り当て構成される。1クラスに情報科から1名、英語科とALTが各2名、探究手法を担当する教員1名の計6名の教員がつく。探究手法担当は全教科の先生が含まれており、学年を問わず探究基礎の担当者として関わっている。時間割は探究週と通常週に分け、相互が有機的に結びつくよう先生方に工夫してもらっている（図1）。

「英語を探究基礎に組み入れたのは、文化背景の異なるALT相手に『自分の伝えたい』ことが『伝わらない』という環境を経験させたいからです。聞き手の概念にないことを、聞き手の『なぜ』といった問いに答えながら説明する力は、どの場面においても生かせる力だと考えています」（中辻先生）

「特にALTの先生はクリエイティブな方が多く、ご自身の経験から良質な問いを立てるなど、もともと探究的な授業をされていたので探究基礎にも関わっていただきました」（杉本先生）

探究手法では知識だけでなく、面白い問いを発想できるように、頭を柔らかくする授業の仕掛けを含ませている。

例えば1学期の最初は「自分が入れ物だと思う物」を新聞紙で作る授業から始まった。生徒たちは思い思いの入れ物を作り、入れる物やその形にした理由などを自分の言葉で説明。自分と仲間

図1　探究基礎の1学期の内訳（10週・30時間）

分類	時間	担当教員	学ぶ内容
探究週	1時間	探究手法+情報	導入、1年間の見通し、気づきノートの書き方
探究週	2時間	探究手法+情報または英語／ALT	『ミニ探究』（チョコレートプロジェクト）前半
通常週	4時間	情報	『ミニ探究』の内容に関連づけて、情報収集および整理（メディア、個人情報、知的財産）
通常週	2時間	英語／ALT	『ミニ探究』の内容に関連づけて、英語で問いを立てる練習
探究週	3時間	探究手法+情報または英語／ALT	『ミニ探究』後半
通常週	10時間	情報	『ミニ探究』の内容に関連づけて、デジタル情報の扱い方
通常週	5時間	英語／ALT	『ミニ探究』の内容に関連づけて、英語で書かれた文献に当たる、ディスカッション
探究週	3時間	探究手法+情報または英語／ALT	『ミニ探究』まとめ

取材・文／長島佳子

ダウンロード可　※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス（Vol.448）

の発想や観点の違いに気づきを得ていた。

また、ミニ探究ではチョコレートをテーマに、問いを段階的に深めていく。最初は「チョコレートを使って疑問文を作ろう」とだけ伝えると、すぐに答えが出る問いを出してくる。しかし、次の時間から「面白い問いを作ろう」と負荷をかけると、生徒たちは、面白い問いを立てるために自分に足りないものを考え始める。対象に関する関心や情報がないと自分の中に問いが生まれてこないことに気づいていく。

授業に仕掛けを含ませる一方で、教員の顔色をうかがわずに生徒が本音を出せるように、教員は教壇に立たず、声かけも最低限にしているという。

主語を付け、単語をつなぎ自身の内発的な動機を知る

自分の考えや学んだことの言語化のために、探究基礎では「気づきノート」を導入。その日の実践、学びや気づき、次に挑戦したいことなどを自由に記述する。

探究基礎が始まる前の昨年度の1年生は、LHRで「I am シート」というツールを使用。「自分とは何か?」と向き合うために、自分の長所・短所、好き・嫌いを言語化して自分の特性に気づき、仲間と伝え合うことで、さらに自分について深く知っていく。今年度も同様の取組をする予定だ。

そのほかにもさまざまなワークシートで考えを文章化する機会を設けているが、生徒が自分の真の興味関心と向き合うために同校が意識しているのが「主語」だ。生徒たちが、テーマ設定の理由を述べたり書いたりするときに、通常「主語」は書かない。例えば、ある対象について「課題意識をもっている」と言えば、本人以外にも伝わるからだ。教員は、生徒たちが研究を進めるなかで、本当の意味で「自分ごと」に引き寄せるために、「課題意識をもっているのは誰?」など、「私」という主語を言わなくてはならないような、小さな仕掛けをするなどしている。

一方で、自らの内発的な興味から課題研究ができている生徒たちは、テーマ設定の際に、その理由をしっかり言語化することができつつあった。さらに自分ごとにできるよう、動機や経験などを入れるように促している。そうすることで自分の物語が動き出すと考えているのだ。

生徒たちが面白いと感じる発見ができるように

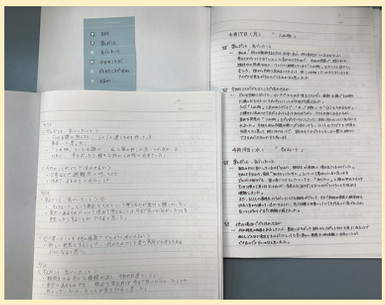
同校の探究基礎は始まったばかりだ。杉本先生は授業を通してあえて「課題解決」という言葉を使っていない。生徒たちが大人に聞こえのいいことではなく、自分が心から面白いと思える「課題発見」ができればいいと考えている。探究基礎では生徒たちは授業を楽しみながら自分の考えをもてるようになりつつあるが、あらゆる場面で意識できるようになってほしいと願っている。

「自分の考えについて単語をつなぐことで文章化する力を、進路選択にもつなげられるのが理想です」(中辻先生)

写真左から、教務部・中辻和宏先生、教育企画部・杉本和歌子先生

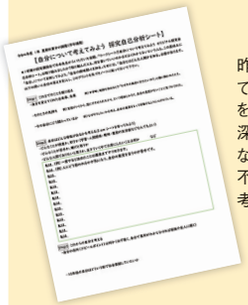
畝傍高校の自分について言語化するためのツール

●気づきノート



探究基礎の授業で毎回記入するノート。その日の実践と気づきだけでなく、それらを過去の経験などと結びつけたり、自分の考えが変わったりしたことがびっしりと書かれている。

● I am シート

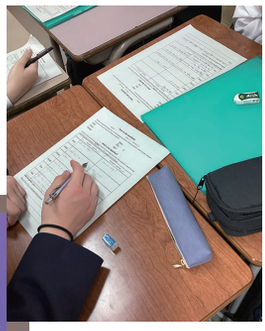


昨年度の1年生が使用していた「I amシート」。自分を見つめ直し自分について深く知るために、自分にどんな特性(好き・嫌いや得手・不得手など)があるのかを考えまとめる。

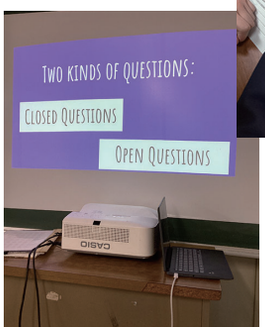
ダウンロード可

探究基礎での活動例

「自分が入れ物だと思う物」を作る授業では、折り紙のようにして箱形にする生徒、平らなまま封筒を作る生徒、何もせず1枚の紙のまま風呂敷のように使うと答えた生徒など、先生たちの想像を超えた発想がでてきた。



ペアワークの授業では、「あるもの」を相手に言葉だけで説明して推測してもらうワークなどをしている。説明する際に使用NGの単語が設定されているため、生徒たちは描写に思考を凝らしながら奮闘していた。



探究基礎の英語分野で、問いの種類について学んだ授業。答えがYesかNoなど、一つしか答えがない“Closed Questions”と、複数の答えが存在する“Open Questions”について英語で学んだ。

学校データ

1896年創立／全日制課程普通科。昨年度に研究開発学校の指定を受け、独自の方法で探究に取り組んでいる。創立127周年を迎え、学校本館が登録有形文化財に指定される歴史ある学校。